

諫早干潟の再生

以前、当新聞でも取り上げた諫早湾の干潟干拓。ギロチン（潮受け堤防）が落とされたのが1997年4月14日。もうすぐ5年が過ぎようとしてます。ずいっと気になっていたので、最近の状況を調べてみました。

海の様子

地元の獺師さんが、諫早湾の様子を次のように語っています。
「プランクトンの量は異常です。肉眼で離れて見えます。あの小さいツブツブのプランクトンが、一つ一つつながって、海草のように大きくなっていきます。堤防の内側には生活排水を溜める池があります。潮水は1年置いても腐りませんが、真水はすぐに腐ります。リンや窒素を含む腐った水を一気に出すのでプランクトンが異常発生しているのではないかと考えています。赤潮の発生回数が多くなり、範囲が広がり、長期間続くようになっています。」
相当海が弱っているようです。

海苔の不作

養殖アサリ全滅、タイラギ漁の収穫量0に続き、去年の1月、有明海

での海苔の不作がいろいろなメディアに取り上げられましたのでみんなも知ってますよね。

全国の4割を占める有明海産の海苔は生産量が多いだけでなく品質がいいと言われていました。ところが去年の1月の収穫された海苔は、海苔の色は黒ではなく黄色に色落ちしてしまっていました。

不作の原因のとして海水汚染やプランクトンの異常発生があげられていました。海苔の生育に必要な栄養分を植物性プランクトンが先に吸収してしまうからです。この異常発生をうながしたのが、諫早湾の水門閉鎖による海の富栄養化だと言われていた。

しかし、去年末の海苔は生産漁家が一致団結して、水質の浄化に専門家の指導を受けながら改善努力を春先から継続してい

干潟は戻るの？

一番関心があるのは「干潟は元の形に戻るのか？」というところで、水門開放調査も安全に実施できる

2001年3月1日
1月西閣掲にとてです。引用
00日新記事このま以下
11本崎記の載たし引
3日長載こがい紹介以下
します。

いわゆるノリ第三者委員会は、失われた諫早湾の干潟の機能を検証するために、潮受け堤防の排水門を開放し、できるだけ大量の海水を導入して干潟を再生させる調査を準備しています。必要な排水不良対策が講じられていれば、調整池の水位をマイナス1mに固定する必要はなく、大規模に干潟を再生させることが可能です。
海水導入による樋門周辺のガタ土の堆積も心配されていますが、同じ有明海に面する佐賀県では、行政が重機でガタ土を除去していません。地元の方の負担にならないガタ土対策は、行政の工夫次第で可能です。そのためにも、老朽化した樋門を改修・整備することこそが急務です。
これらの防災対策は、開門調査の有無に関わりなく緊急に行う必要があり、それを行うことが、十分な開門調査をも可能にし、有明海全体の環境回復への重要な第一歩となるのです。……引用終わり

潮受け堤防内部の多くの部分は、干上がりはしたものの元のガタ土が多く残されています。そして何よりも、諫早湾には最大5メートルもの潮位差があり、水門を開放すれば、毎日2回、海水とともにプランクトンなどが諫早湾から堤防内部に流れ込み、また潮が引けば、ガタの表面が空気に触れる。かつて約3000ヘクタールの広大な干潟を育んできた大きな自然の仕掛けはそれほど変わっていない。確かに、全長7キロの潮受け堤防に対して、現在の水門は二ヶ所合わせて250メートルで、この水門だけでは、海水の交換は不十分だとも言われている。それでも、何年かかかるかはともかく、水門開放により、干潟が回復すると言いうことは、多くの科学者から指摘されています。
人間が犯した過ちに対し、自然はまだやり直すチャンスを残してくれている。自然の力と言うものは本当にすごい。改めて感心しました。みなさんはどう思われますか？

PRIVATE